

瑞岩寺報

2012.08.01
(平成24年 葉月)

【お盆号】

お盆総合案内

お盆法要

今年のお盆法要は左記の通り行なわれます。

昨年とは時間が異なります。ご注意ください。

【期日】8月4日(土)

【時間】午後1時～

【お盆の供養料】

◎先祖供養塔婆 5,000円

◎新盆供養塔婆 10,000円

【内容】檀信徒すべての精霊のお盆法要をします。

◎新盆塔婆供養

◎先祖塔婆供養

◎『般若心経』

◎御詠歌

法要後、お塔婆をお持ち帰りください。

粗品がございますので出欠席のハガキを返信ください。

お盆棚経参り

【期日】8月5日(日)～8月13日(月)

昨年より始めました各家へのお盆のお参りはお盆法要終了後から開始しま

す。副住職が早朝から夜まで約320軒の檀家さんを回りお棚経をあげます。どうしても都合の悪い場合は都合のよい日を返信ください。短い時間ですが、ご家族と一緒に参りをお願い申し上げます。

お盆参り予定日程 ※多少変更される場合もあります	
7月13日(金)～17日(火)	東京・神奈川・埼玉南部
8月5日(日)	太田市外(群馬県外・前橋・館林地区)
8月6日(月)	太田市外(足利・桐生地区)
8月7日(火)	太田市内(太田地区)
8月8日(水)	菟原地区、その他
8月9日(木)	七日市、落内、唐沢地区
8月10日(金)	丸山、清水、反丸地区
8月11日(土)	矢田堀地区
8月12日(日)	矢田堀地区
8月13日(月)	(予備日)

【時間】〈早朝〉6:00～9:00 / 〈午前〉9:00～12:00 / 〈午後〉12:00～15:00 / 〈夕方〉15:00～18:00

お墓そうじ

瑞岩寺にお墓のある方へのご案内です

【日時】7月29日(日) 午前6時頃から

お盆が近づいてきました。お墓のお掃除をしましょう。お盆前の一斉お墓掃除を右記のごとく行ないます。たまには早起きしてお墓掃除も気持ちいいものです。お子さんやお孫さんといっしょにどうぞ。

◆強制ではありません。この日この時間でないといけないということではありません。◆自分のお墓の掃除が終わったら通路など共有の場所のお掃除も積極的にお願いします。◆遠方の方はお寺でやっておきますのでご安心を。◆飲み物の用意、あります。

Attention!!

以下の点に留意ください。

【お盆法要について】

◎お盆供養塔婆について、「必要」・「不要」を返信ハガキに記入してください。

◎「必要」の場合はお盆法要に「出席」・「欠席」を返信ハガキに記入してください。

◎「必要」で「欠席」の場合は、必ず8月4日以降に塔婆を受け取りに出てください。

塔婆供養料の振込みを同封します。毛里田地域の方は世話人さんにお渡しください。

塔婆を受けられる方は風呂敷などを、ご持参ください。

【市内・県内外の檀信徒の方に】

市内・県内外の方は同封の振込用紙

をお使いください。

県外の方でお塔婆をお供えできない方は瑞岩寺でお墓にお供えいたします。ご一報ください。

【お盆参りについて】

◎お盆参りについて「必要」・「不要」をハガキに記入してください。

◎「必要」と記入されたお宅には、8月初めにお参りします。

◎「不要」ならば「返信なし」の場合はお参りには伺いません。

「必要」だけ日時が合わない場合は、希望日をお書きください。調整いたします。

返信期日までに必ずお送りください。その結果により順番を決めお参りします。

返信葉書は7月31日必着です。

【永代供養墓・水子供養墓関係者の方へ】

永代供養墓または水子供養墓にお入りになっている方については、瑞岩寺で責任をもってお盆の供養をしておりますが、個別でのお塔婆を希望される方はお申込みください。供養料は前項にある通りです。

【ペット供養墓関係者の方へ】

ペットの合同供養は左記の通り行なわれます。

【日時】8月4日(土) 午前10時より

【お盆のペット塔婆供養料】4,000円

◆強制ではありませんので、ご供養し

松本市神宮寺住職、
ライフデザインセンター代表理事

高橋卓志さん

インタビュー

(副) 今日ではインタビューに応じていただきまして誠にありがとうございました。いつも大変お世話になっております。今後のお寺のあり方について、また高橋さんの思っていることなどをお聞かせください。

(高橋) 3・11、東日本大震災が発生した直後、ひよっとしたら、お坊さんたちが今回の震災にかかわることによって、新しい日本仏教の展開ができるかもしれないと考えた。すさまじい大量死が襲ってきたとき、死者を目の前にしてお坊さんがしなければならぬことが、必ず見えるに違いない。それは言い方を変えれば、いままで社会的に動こうとしなかったお坊さんたち、葬儀の場でもわずかな時間だけしか死者や遺族と向き合えないお坊さんたちの意識を変える Big Chance だと思つた。そして、この震災は、「寺とはなにをやる場所か」「お坊さんとは何をやる人か」ということについて真剣に考えてこなかったお坊さんたち、苦しみを待つ人々に真正面から向き合つてこようとしなかったお坊さんたち、「お坊さんとしてどうするのか?」という課題を突きつけているように感じ

た。そのためにもまず、お坊さんたちが現場に入るルートを作ろうと思ひ、3月14日早朝、福島県の川俣町に入り、地震とそれによる原発事故で、町の機能が壊滅している南相馬にむかった。

震災前の3月2日、「禅文化研究所」が主催した臨済宗、黄檗宗合同の布教研修会があった。ぼくは2日間、若手のお坊さんたちに対して、神宮寺の事例を中心に講義した。現代仏教はいま、危機的な状況を呈している。それは、「葬儀」という部分に如実に顕れている。たとえば、島田裕巳氏が著した『葬式は、いらぬ』による葬儀の再考。あるいは、宗教的儀式を行わず、病院や施設から火葬場に直行する「直葬」(「ちよくそう」あるいは「じきそう」)に象徴される葬儀規模の明らかな縮小傾向。これらはお坊さんにとって、既得権を侵されるものと捉えられている。そういった危機感からか、研修会のメインテーマに葬儀があがっていた。

神宮寺の葬儀は、死者や遺族と真正面からかかわる。だから住職であるほくや寺のスタッフは葬儀に膨大なエネ

ルギーを費やすことになる。その事例を彼らに正直に、正確に話した。しかし、20代から40代の若手のお坊さんたちの反発は大きかった。

たとえば、故人の生前を会葬者の心に残すために、生前の写真や映像に取り込み、好きだった音楽を加えながら進行する葬儀方法。あるいは誰もが生き方が異なるのだから、見送る方法も異なつて当然、という意識から、ひとり一人のオリジナルな、つまり「その人なり」に行われる葬儀方法。このような神宮寺の葬儀手法が、仲間意識に縛られ、超保守的で進取の気風などなかったお坊さんたちの前に開陳されわけだ。そのとたん、彼らから出てきた言葉は「禅宗の本質をはずしている」だった。そして、「禅宗の葬儀はなにより引導が勝負だ」。「引導で参列者も遺族も納得させなければいけない」。結局は「あんたがやっていると、坊さんは、葬儀社がやる事であつて、坊さんがするべきことじゃない」などなど、世間を知らない若造どもが、精一杯の反発を見せたのである。

予測はしていたが、この猛反発には驚いた。そして、なぜなのかを考えたい。ぼくはこの講座で、彼らが刺激を受けてどう変わっていくかを見たかった。そのためにあえて挑発したのである。しかし、変わろうとしない。自分の領域をかたくなにガードするだけの主張は続いた。

葬儀社のホールで行われる葬儀を思い出してほしい。あの場での坊さんの役割は、葬儀社によって決められた時間、お経をよむだけのものではないのか。このことは、仏教領域が排除さ

れた葬式になることを意味している。しかもそれには加速度がつく。ぼくは、それがお寺の危機だ、と言おうと思つた。しかし、そのことを彼らはまったく危機感としてとらえていない。だが、そういうことを指摘され、痛いところ、キツイところをつかれたがゆえに、そしてプライド(らしくもないものだが)が傷付けられたと思ひ込んだがゆえに、よけいに反発は起こつたのだろう。

200名の参加者にぼくは資料として、自著『寺よ、変われ』と神宮寺の葬儀のパンフレット『あなたが旅立つ日のために』を配布した。『あなたが旅立つ日のために』は、神宮寺の全檀家さんに配っているもの。その内容は、神宮寺は、あなたや家族の葬儀に正面から向き合い、そして納得した旅立ちの儀式になるよう、旅立つあなた自身や、家族といっしょに考え、行つていきますという決意をあらわしたものの。檀家さんたちはこれを愛読書にしているというスグレモノだ。

そこには、金額を提示した祭壇や食事各種、どのように葬儀が行われるかの手順、返礼品のアイデアなどが満載されている。このパンフレットの核心は、費用の無駄を省くため、葬儀社の介入を無くすか、あるいは最小限にとどめることにある。いま、ほとんどの場合、葬儀は葬儀社が主導している。葬儀社がいなくていいと誰が思ひこんでいる。そこを劇的に変えていく。そのために、旅立つあなた自身が「どう見送りたいか」という生前意思をしっかりと表明でき、その意思を喪主や遺族が受け取り、寺が協力して行



つていく、ということが必要だ。だから『あなたが旅立つ日のために』には、旅立ちの前、旅立ちの時、旅立ち後、その人自身や喪主・遺族はどうか、寺はどうサポートするかが細かく記されている。そして、このパンフレットによって、神宮寺の葬儀は、現実には大きく変わってきている。

①自分のためのリンピングウイル（生者の意思）を表明する人が多くなってきた。その結果、事前相談は増え、現在、事前相談は全葬儀の60%ほどにまでなっている。

②自分が厳しい状況になったときに、寺が支えになってくれることが認知され、それに寺が対応することで、檀信徒と寺の間に深い信頼感ができてきた。そして、そのことは葬儀を執行するうえで、両者の関係性が良好になっていくことにつながった。

③葬儀費用は（お布施も含めて）ブックボックスの中にあり、表に出ない場合が多い。見積り書・領収書のたぐいは必要ない世界なのだ。その中で、いかに檀家や遺族の側に立ち、経費を軽減させるかを寺が真剣に考えているということが理解されてきた。実際、神宮寺の葬儀は、近郊の葬儀社と比較した場合、1/3程度の費用でレベルが高い葬儀ができていく。

④神宮寺の葬儀はほとんどが寺で行われている。葬儀社に負けない設備とかがわりを、寺やお坊さんが持つことはなかなか困難だ。神宮寺の場合、このパンフレットのような葬儀ができるまでに30年の歳月がかかっている。その過程を檀家さんたちはしっかりと見ていた。だから、その苦労が理解され、信頼を寄せてくれる。

この『あなたが旅立つ日のために』は、一見豪華で、お金がかかったパンフレットのように見える。だが、ここまでしっかりと調べをし、編集したものでないと、しかも書いてあることが実際に行われないと、何の意味もない。それができているから、檀家さんたちの愛読書になっているというわけだ。

一方、この『あなたが旅立つ日のために』を見た研修のお坊さんたちは、これは「葬儀屋の仕事だ」と即座に言った。そう思うのは仕方ないこと。なぜなら、旅立つ人や遺族との深い関係をしつかり築き、それを葬儀に反映しようなどと考えるお坊さんは多くないし、それにより檀家と寺との関係も希

薄になっている。そして、そこまで寺がやる必要はない、と思いつ込んでい「葬儀は葬儀社に任せておけばいい」という意識が、喪主・遺族、寺、そして一般の人々に刷り込まれている。だから、死が訪れた直後に、喪主となる人は葬儀社に電話をかける、そこから湯水のようにお金が使われる消耗型の葬儀が始まることになる。

神宮寺の檀信徒は、死亡通知の電話を、まず、神宮寺にかける。真夜中でも平気で……。なぜなら、24時間受け付けていること、搬送や枕経、打合せ、火葬の予約、その後の処置を葬儀社ではなく住職自らがぬかりなくやっていることなどを檀家さんはよく知っているからだ。

こんなことを見ていくと神宮寺はやはり葬儀社の仕事をやっているじゃないか、と言われるそう。しかし、3、40年前の寺はこうだった。そしてそのことが、死者や遺族とのかかわりを深め、信頼感を生んでいたことを思い出さねばならない。

いま、葬儀の際、喪主家から連絡を受けた寺は、いったいどのように動いているかを考えてみたい。

一般的には葬儀社あるいは喪主家から電話がきて、○月△日に通夜に来てくれ、×日に告別式に来てくれと依頼される場合が多い。お坊さんたちは鞆に衣をつめて10分前に葬儀社のホールに着けばいい。それまでに死者は清拭を終え、死亡粧を施され、死装束をまとい、柩に納められ、火葬手続きも済み、火葬場への移動も確保され、食事の準備も完璧にできている。すべての準備が整ったところにお坊さんがエラ

そうに登場する。そこでは、40分とか1時間と時間を決められ、お経をよむだけ。しかも都会では菩提寺の和尚さんがお経をよむのではなく「派遣」のお坊さんの場合も多々ある。これだけで（これだけで）何十万円というお布施になる。こりゃあ、詐欺だ。檀家さんの多くは、すでにそのことに気付き、いい印象を持っていないが、なかなかクレームを表に出せない。

また、檀家さんたちは、お布施を葬儀執行の対価と考える場合が多い。あの程度の仕事で、高額のお布施を出さねばならない、と考えるわけだ。このことは、お坊さんと檀家さんとの間にいま、大きなギャップとして顕れている。大切な人を見送る悲しみの中で、お寺は結局のところ、何もしてくれないじゃないか、という話になってしま

臨済宗・黄檗宗の研修会でそのような話をした。そうしたら参加者たちは「あなたの考えは違う」と再び反発を強めた。

この研修会では、参加者に事前のアンケートをとってあり、その中で「どこで葬儀をしていますか」という問いがあった。その結果は、驚くべきものがあった。葬儀社での葬儀が86%、寺はわずか4%となっていたのだ。もう末期的。何のために寺があるのか？あの伽藍はいったい誰のためのものなのか？

葬儀社での葬儀は、どんどんお坊さんの仕事を減らし、葬儀でのお経は、旅立った人に真摯に届くこともなく、遺族には単なる形式としてのBGM、しかも聴き心地のきわめてよくない

BGMとしてしか耳に入らない。では、君たち、この状態をどうみるか、どのようにこれを突破するか（突破する必要はあるか？）、とぼくは研修のお坊さんたちに聞いてみた。すると彼らは「引導」と「一喝」に命をかけている、と自信深げに言う。しかし、それだけで納得できる遺族など、いま、ほとんどいない。しかも『引導法語集』から引用した程度の漢詩を使っているのかという説明もせず、一方的に行われる儀式に、檀家の人たちは納得できるわけがない。

このことは戒名にも言えることだ。戒名はその人の生きてきた過程における意思や願いなどを、短い文字の中で表わさねばならないものだ。そのためには、その人との生前の関係性が必要になる。同時に戒名をいたたく意味を伝えること、文字を選ぶセンスや知識も必要だ。それができないから『戒名辞典』や『戒名ソフト』に頼ってしまう。

君たちは、亡くなった人の何十年という生涯を戒名に表す苦しみを味わったことがあるか？それを乗り越えてこそお坊さんのプロとしての存在意義があるのではないのか？とぼくは研修のお坊さんたちに問うた。しかし、的確な答えがない。お坊さんのプロフェッショナル（専門性）が失われていることをひしひしと感じた。

これらは、葬儀の改革ができないお坊さんたちの根本的な問題だと思ふ。

禅宗伝来の葬儀には、鎖龕（さがん

＝柩の扉を閉じる儀式）念誦・回向、起龕（さがん＝柩を担い引導場に行くための儀式）念誦・回向、授戒、引導という流れがある。それを固持し、きっちりやることは必要だが、その場合、なぜこのような儀式が行われるかの説明が不可欠。しかし、葬儀の場でこのような説明を聞いたことがない。しかも、現代社会の中で、この葬法が必ずしも檀家さんの納得を生むかという、そうでもない。

いま行われている葬儀は、すべて宗派の法式に立脚しているのであって、旅立った人や遺族に立脚しているものではない。・・・というのがぼくの基本的な考え方であり、そこから脱却するにはどうしたらいいかを考え、実践しているわけだ。

だから、神宮寺の葬儀は、その人その人の最後の儀式であることを第一条件とする。その中で、落してはならない禅宗の授戒と引導は必ず埋め込み、それをきちんとわかるように説明していく。授戒の際に必要な『懺悔文』にしても『三帰戒』にしても説明しないと檀家さんたちはほとんどわからずい。

授戒に際しては、この人は仏教徒だという認識をまずしてもらわなくてはならない。だから「あなたは仏教徒だよ」ということ、つまり「あなたはお釈迦さまの大切なお弟子だよ」ということを親族に納得してもらうことから始める。

まず、生きてきた何十年もの中で、知らず知らずの間にホコリとかアカが降り積もり、いろいろな罪を犯してき

たわけだから、それをいま、懺悔（ざんげ）しましょう、といて懺悔文（ざんげもん）を唱える。それによって心身ともに清浄になったところで三帰戒を受け、仏教に帰依する（信心を深める）という約束の儀式をする。懺悔文、三帰戒という条件がクリアされたところで戒名が授与される。授戒は普通なら、師家（しけ）と呼ばれる修行を成就した高僧の指導により、3日とか、丸1日の修行をする（生前授戒）ことになっているのだが、授戒を受けていない人には、葬儀の際の短い時間の中でその儀式を行う。そして、その後、戒名が授与される。

授戒の意味やその流れが理解できたとき、遺族は納得するはずだ。だから、そのために、授戒や戒名についての内容や、なぜこのような戒名になったのかを、遺族・会葬者に口頭で説明し、映像を使って文字としても見てもらう。そこで彼らは、仏教（禅宗）で行う葬儀の意味が初めてわかることに



なる。お坊さんには、そういった努力とアイデアが必要。

また、授戒で渡された戒名については、位牌に書かれた文字を見て「なるほど、故人にピッタリだ」と、故人をよく知る遺族や会葬者が頷いてくれること。ここがお坊さんにとっての大きな勝負であると思う。

そのような戒名を作っていくためには、知識・見識を持ち、多方面、異分野に目を向ける感性が必要だ。

ぼくは葬儀の際、その人の生前をどのように皆さんに伝えるのか？この人の葬儀をどのように作っていくのか？周りの人たちはこの人をどのように見送ろうとしているのか、を第一に考え葬儀を組み立ててきた。しかし、故人を一生懸命見送ろうとしている人もいれば、中には消化試合のように考えている人もいる。そのような違いはあっても、その人なりの送り方をどのようにしたらいいのか、ということをお坊さんが必死になって考えることにより、故人の尊厳をまもることができ、見送る人々の心に、故人の人生が暖かく残されるのだと思う。そのためには、その人がどのような生き方をしてきたのかということをお坊さん自身が生前の付き合いの中でしっかりと知ることが大事。生前、ご縁が薄かった場合は遺族に取材をし、それを葬儀の際に表していく。それが、神宮寺型葬儀の特徴だ。

引導にしても同じ。その人の一生を短い漢詩を使って表すことは、とても難しい。だから、できるだけわかりやすい漢詩を入れる。ぼくの父（先代住職）は漢詩のプロだったが、父が作っ

ていたのは本当に分かりやすいもので、故人を五言絶句、七言絶句で表したらまさにそうなる、というものだった。

研修会に参加した若手のお坊さんたちは「引導が命」と言う。しかし本当に「命がけ」の引導を渡せるのか？是非、彼らがどんな引導を渡すのか聞かせて欲しいものだ、と申し上げておいた。

今日もお葬式があった。25年前に奥さんを見送って85歳で亡くなった方のお葬式。いいお葬式だった。2週間ほど前は、44歳の女性Oさんが亡くなった。子どもさんがいないが、とても仲のいいご夫婦だった。2年前にOさんがスキルス性の胃がんだということがわかり、手術。そして抗がん剤治療と続いた。小康状態を保っていたのだが、去年の11月、再発が認められ、再入院。初発の場合は、治療における選択肢が豊富だが、再発の場合、治療法はかなり限られ、現実の問題として「死」と向き合わねばならない場合も多くある。それは患者さん本人だけでなく、家族も同じ。そのような状況におかれたOさんの夫は、考えあぐねた末、神宮寺を訪ねてきた。

Oさんの病状を考えたとき、選択肢は限られていた。その中で、「何とか救いたい」という夫の強い思いが「セカンドオピニオン」へつながっていった。セカンドオピニオンは、主治医の意見（ファーストオピニオン）だけではなく、他の専門家にデータを診てもらい、別の意見を聞くというものだが、ファーストオピニオンと大差はな

い、というのが現代医学の常識になっている。でもそこに希望を見出した、と彼は言った。そこで、すぐに彼は諏訪中央病院の鎌田実医師に連絡を取り、セカンドオピニオンの仲介をした。それはあく自身が、Oさんが亡くなるまで、夫や家族と一緒に彼女に寄り添い、支え、ともに闘うという意味を持つものだった。セカンドオピニオンはやはり、主治医と同じ結論を出した。悲しいけれど、死に向う準備が始まったのだ。

3月、4月と予期悲嘆を感じながら、夫は妻に深く寄り添った。5月30日、突然彼女の体調が良くなった。これは、いわゆる「仲良し時間」と呼ばれるもの。二人に現れたとつてもよい時間ではあったが、その直後の6月2日、死は訪れた。夫は涙にむせびながら「住職、いま逝きました。彼女、本当にがんばりました」と電話をかけてきた。ほくも泣きながら搬送の手配をし、自宅へ向かった。彼は遺体に寄り添い、手をにぎり続けていた。約半年、Oさん夫婦の悲しみに付き添い、Oさんの死に向かう過程を夫と一緒に見続けたほくは、Oさんの葬儀をどのようにしようか、ということでも頭の中が一杯になっていた。

ほくは葬儀の際、ターゲットを絞る。それはもつとも痛んでいる人、悲しみが強い人、立ち直れそうにない人がターゲットになる。そして想いのすべてをその人に注入するというイメージで葬儀を進める。Oさんの場合のターゲットは夫だった。それ以外になかった。

奥さんが亡くなる前日、夫が寺に来

た。そして葬儀の話になった。死ぬ前に葬儀の話をしていくわけだ。不謹慎といわれるかもしれない。その中でほくは彼にこう言った。「つらいかもしれないが、彼女が生きた人生を、親族や友人たちにしつかり見てもらいたい、心の中に彼女をしまいきんでもらいたいね」と。すると彼は「住職、もうできますよー」「44年間の彼女の人生、15年の結婚生活を回想し、映像化したものができあがっている」と言うではないか。

じつは彼は神宮寺の葬儀方法をよく知っている。7年前の父親の葬儀では、読売ジャイアンツの大ファンだった父親の柩の中は、ジャイアンツの応援グッズで一杯になった。そして葬儀の冒頭に流れた音楽は「読売ジャイアンツ応援歌」だった。そういった経験から、いま、世を去ろうとしている自分の妻との思い出を自分の手で映像に残し、葬儀の場で会葬者に見てもらおうとしている。しかし、この映像が突然出てきたら、会葬者はその意味が何か分からないかもしれない。そこで、ほくは導入として映像を作ろうと思った。彼がその映像を作るまでの辛く、苦しい経緯を描こうと思ったのだ。確かに彼はポロポロになり、号泣しながら2人の思い出の映像を作りあげていったのだ。ほくが受け持つ仕事は徹夜になった。でもこんなことは度々起こる。いいお別れをしてもらうためなら、少しぐらいの睡眠不足は関係ない。このように、ひとつひとつの葬儀に入り込み、真剣に関わるエネルギーというものは半端ではない。しかし、それがほくのお坊さんとしての仕事で

あると考えれば、何の苦もなくできるものなのだ。

最愛の妻を亡くした夫と同じように苦しみ、悲しみ、同じように涙を流す。このような葬儀を作りあげ、関わられたというのは一種のナルシズムといわれるかもしれない。しかしそのことよって、寄り添ってくれた存在があったと感じてくれたOさんや、Oさんの夫のグリーフ（悲しみ）は、間違いなく軽減される。

いま、グリーフケアは学術的になりすぎ、ひとつひとつの現場における異なる状況や感覚が取り込まれていない。しかもグリーフケアはお坊さんの仕事であるといわれながら、実質的なグリーフケアを動かしていくには程遠いのが現状だ。それどころか、このグリーフケアを売り物にする葬儀社があらわれている。グリーフケアを葬儀社に任せてお坊さんは平気でいられるということなのか。葬儀からグリーフケアへの展開は、真剣に葬儀にかかわれば必ずできるもの。真剣にやっついていからできないだけだ。

葬儀に関していままで話したことをまとめてみよう。

神宮寺では毎年40〜60件の葬儀があるが、昨年と一昨年の葬儀の半分が檀家以外のお葬式だった。普通の寺では考えられない。そうなのは「神宮寺の葬儀はいい」という口コミからだと思われる。葬儀に対しての人々の意識が変わってきていることは事実。そして葬儀に何を求めているかと言えば、何度も言うように納得できるということ。加えていかに無駄をばぶいて

経費を安くできるかということ。だれもが「葬儀は高い」と思い込んでいる。葬儀社の価格はパッケージになっている場合が多いから、不要なものについて「いらぬ」となかなか言えないし、要・不要がわからない場合もある。それが葬儀費用を高騰させている。しかし、『あなたが旅立つ日のために』には、葬儀費用を半減するコツまで書かれている。また、神宮寺報『唯々諾々』には、葬儀社と神宮寺で行った葬儀費用の比較表まで掲載されている。寺を使えば、葬儀社を使う場合の1/2から1/3で葬儀ができることを、神宮寺の檀家さんたちは周知しているのだ。しかし、このような情報を寺が出すことはあまりないが、出す必要性はあるし、出したとき、葬儀は明らかに変わる。

現在の、そしてこれからの葬儀ビジネスのターゲットは団塊世代70万人。あと30年+aで70万人が確実に死んでいく。それを見越して、葬儀ビジネスが大量化・多様化している。たとえば、流通大手であるイオンがいい例。次はコンビニまでが参戦するという。イオンの場合は、イオンのカード会員1700万人がターゲットになっている。その人たちは葬儀を買う消費者Ⅱ「コンシューマー」。棚の上に乗っかけている「葬儀」という商品を買うわけだ。もちろん商品だから、さまざまランクがある。イオンの場合は、AランクからFランクまで7段階あり、一番安価なランクは19万8000円。最高はおよそ150万円。それを自由に選べるし、それは分かりやすい。

ところが、寺の場合、檀信徒には葬儀を買うという概念はまったくなく、寺を護持する檀家が寺に葬儀を執行してもらい、そのためのすべての手続きや準備を葬儀社に依頼するというものだ。檀家とは言ってみれば寺の「スポンサー」。もともと消費者感覚もなければ、寺からのサービスに期待する人々でもない。かつては深い信仰で結ばれた関係ではあったが、現在は寺から依頼される護持運営のための寄付金を、文句をいながら出すスポンサー。このコンシューマーとスポンサーの葬儀に対する感覚の違いは大きい。

昨年、イオンの葬祭担当のトップと京都で対談した。そのとき神宮寺で行っている葬儀の費用とイオンとの料金対照表を見てもらった。イオン19万8000円と同じものを神宮寺では5万8000円でできてしまう。もちろん同レベルで、だ。イオンのトップはそれを見て、「お寺がこのように動き始めたなら、ぼくらは退散するしかないですね」と。

ではお寺はなんでそうしないのか？ということも考えておいた方がいいと思う。

(副) 「やはり、手間がかかって大変だからでしょうか？」

(高橋) やはり、面倒なんだろう。そして、もうひとつ、新しい試みをする周囲のお寺にいろいろ言われるということもあるかな。

あまりにも宗派を意識したお坊さんが多い。そしてそれが「ムラ」を構成

する。「原子カムラ」と同じ「ムラ」。つまり仲間意識が強く、つまなければ生きていけない人たちの集団。その中で評価しか通用しない世界。それは何か新しいことに挑戦しようとする人たちに集団でプレッシャーをかけるか、あるいは「シカト」無視する。いま、仏教宗派は、そのような状況にある。それは決して社会にいい影響は与えない。

仏教宗派に関して言えば、押さえておかねばならないことがある。それは宗派を構成する宗教法人は、大きく括れば公益法人の範疇に入るとのこと。つまり、教団や寺は、一種の公益性をもった宗教法人として成り立っているということだ。宗教法人の公益性とは、宗教が精神的な支柱として、あまねく人々の心の糧となる機能を持っていることを言う。現在、その意識が欠如していると思わざるを得ない。宗教法人が宗教関連（信施）収入に対して非課税という優遇を受けているのは、公益的な仕事をしている、という認識からだ。宗教が多くの人々に、精神的・倫理的・宗教的なメリットを与えることと、課税を相殺しているのだ。

ところが、一般の寺は檀家システムの中にあり、寺が宗教的メリットを与える対象は、檀家に限られるのが普通。それは組合組織と同じことで、檀家さんがいわば組合員。こういうのを「公益」ではなくて、「共益」と言い、檀家しか利益を得られない組織になっている。

税制優遇をうけている団体が、公益性を担保できなくなったということ

は、深刻に考えなくてはいけないことだと思う。そういう意味を含めて、「宗教法人」設立の意味とか、定款としての寺院規則の再構築などをもう一度洗い直さねばならない。

公益法人の責務として外してはならないものに情報公開がある。情報公開とは、寺の事業報告、決算報告を正確に行い、事業計画、予算計画をきちっと出すというもの。それは一般の会社や組織ではごく普通のことなのだが、不思議なことに宗教法人はそれが正確に履行されなくてもおとがめがない。そのように、寺の足下が明らかになっ

ていない状態で、檀家さんに法話をしても、それが檀家さんたちの心に届くはずはない。その部分さえ分かっているれば、寺はきちんと運営されていく。ほくの場合はそれを『僧伽（サンガ）』という神宮寺の季刊誌で檀家さんにしつこくくりに語ってきた。そしてそれが大きな情報公開の基盤となった。寺とはこういうことをする場所である。住職であるぼくは、こういう意思を持って寺を運営し、公益的な仕事をしていくのだということが、季刊誌上でしつこいほど繰り返された。足元を見せ、いい情報も悪い情報も公開した。そうなったとき、明らかに信頼度は増し、同時に檀信徒からの寺へのアクセスがものすごく大きくなった。

ひとつの例としてあげれば、法要の際の檀信徒の参加が増え続けていることだ。昨年のお盆法要は、同じ法要を4回行った。今年は5回になる。なぜなら、5回やらないと入りきらないほどの檀信徒が寺につめかけるから。1

回につき200人を超え、250人あるいは300人を超える場合もある。したがってお盆法要の総参加者は千人を超える。神宮寺は檀家700軒弱の寺。そのような規模で法要に千人あつまるというのも考えられない。しかも若い人が圧倒的に多い。お盆法要だけでなく、春に行われる「お花祭り法要」でも同じ現象が起きている。しかも参加者は、イヤイヤではなくて、毎回来しみに来ている。理由は法要が面白いから。意外性があるから。しかも法要に出会うと何が得られるから。ただ、お経だけを聞かされているわけじゃない。

神宮寺の場合は、この部内（地域内の関連寺院）が7ヶ寺。その中でお盆のお施餓鬼法要をやっているのは5ヶ寺。毎年、各寺の住職は各寺院の施餓鬼法要に出仕する。1ヶ寺1ヶ寺、全部回り、それでお互い「行って来い」になるわけ。しかし神宮寺の場合は4回〜5回もの法要だから頼めない。したがってぼく一人でやらねばならなくなつたというわけ。どうしようかと思ひ悩みながらも、毎年テーマを決め、そのテーマに合ったゲストを迎え、いっしょに法要を行うという方法を考えて。たとえば、モンゴルから8人のチベットを招聘し、チベット語の声明と日本のお経のジョイント。韓国舞踊とパークッション集団「サムルノリ」とお経のコラボ。日本舞踊・花柳流の若手とお経の共演。女優・渡辺美佐子さんが語る「くもの糸」を中心にした語りとお経。歌手の小室等さんの歌声とお経の掛け合い。フラメンコダンサーのオリハさん、コンテンポラリーダンサーのタクジさんとお経の合体などな

ど。そして今年は津軽三味線の高橋竹山さんとの施餓鬼法要が準備されている。毎年変わる法要の内容。しかもこの法要のためだけに制作された出しものが流れているという仕掛け。そういうところが創りあげる方としても面白くてたまらない。同時にその内容が洗練されていて、精度が高ければいいことはない。檀家さんたちが夢中になるのも無理はない。

このように、檀信徒が寺に集まる機会が増えてきたとき、寺と檀家の間の理解が深まり、さまざまな問題が解決・解消していくことにもなる。

たとえば、「神宮寺は後継者が大変」と、ずっと言われ続けてきた。男の子が2人いるが、2人とも寺を出て社会人になっていて後は継がないし、このようにいろんなことをやってきた住職の後には、さぞかし大変だろうとい



うおせつかいな声だ。じつは、ぼくが住職になったとき、2つのことを目標として掲げた。そのひとつが「世襲は断つ」。もうひとつは「檀家システムを根本から考え直す」だった。寺の世界で、世襲はいま普通になっている。世襲率は歌舞伎役者に次ぐもので、国会議員のそれをはるかに超えている。そしてその弊害が随所にあらわれている。「家業化」。お寺が家業になるということ。その場合、仏教という「発心」や「慈悲心」をベースにすることより、運営や利益・利権が優先される場合が多い。それは仏教の教えを教化するための大きな障害になる。だから世襲は断つと決め、子どもたちにも伝えたい。すると、今度は、後継者の問題が出てくることになる。目標を成就するためには、その覚悟は必要だった。そのため日本中を探し回った。神宮寺は、情報公開とそれに基づく信頼関係の構築がぼくの代でなされている。それを継承し、時代に合わせた展開ができる人材を探しに。

神宮寺は今まで寺の機能を最大限活かす方法を考え、実践してきた。そのためには多くの人々や、異分野の組織などのかかわりを持つことが必要だった。それが得意なものとして寺関係者には映り「大変だろう」と言われていたわけだ。しかし、そのように寺が動いたとき、檀信徒との間は深い関係性が築けるようになった。寺檀関係にトラブルは皆無。これ程、寺として楽なことはない。探しまくった末に見つけた神宮寺の後継者は、いま、修行中。次の世代が活躍できる基盤は、す

でにできあがつている。

何度も言うように、檀家さんと寺の間に、信頼関係ができていたというところが震災で、ぼくは発生直後に寺を飛び出した。その1週間後からお彼岸が始まったのだが、ぼくは檀家回りができず、いつも手伝いをお願いしているお坊さんをお願いした。彼が各家に伺うと、どこでも冒頭「住職はもう被災地に行っているんだらう」と聞いてきたという。住職が日頃何を考え、どう行動しているかが檀家さんにはよくわかっていて。それはとてもありがたいことであり、そこまでの努力が報われたことに喜びを感じる。お彼岸参りで住職がうかがわなくても文句は言わず、かえって支援金がいっぱい集まってしまう。そういう寺ってあまりない。

これらが30年間、計画を立て目標を作りながら、必死で動いてきた神宮寺の姿だと思ふ。

宗派や地域の寺に立脚するのではなく、檀家さんの側に立ち位置を持ち、常に寺の情報を正確に隠さず出していくこと。神宮寺が10年間100回と決めて行った「尋常浅間学校」のように、継続性を持った、質の高い文化行事。人々の悲しみや苦しみを、門を開け迎え入れる葬儀やグリーフケア。異分野とのつながりを模索し、とくに医療や科学との情報交換・学術的交流への志向。そのようなものが詰まっているお寺は、かならず次なる時代の要請に込めることができる。

1988年、神宮寺では建物の建設とか、晋山式などの大きな行事などの際に檀信徒へ依頼する「寄付金」を貰わないということを決めた。それ以降寄付の要請をしたことは1度もないが、結局その後3億円を超える事業をやっている。まず、葬儀や尋常浅間学校に使えるホールを建て、本堂横にあった土地を買い駐車場を造成した。ホールの建設費が2億円を超え、駐車場は1億3000万の費用がかかった。普通の寺なら、すぐに寄付帳が回る。檀家さんは、いろんな思いや文句を言いながらも、寄付をする(せざるを得ない)。はたしてその寄付の対象事業が、檀信徒のためのものあるか否かは関係なく、責任役員会や総代会、そして住職の意思により、事業は決められ実施され、そのための寄付が行われる。

寄付行為に本来「信施」である。つまり檀信徒の信仰が基になり、その証として「喜捨」とするというのが寺への寄付だ。しかしこれがいま、強制的に行われる場合が目立つ。しかも必要な事業か否かの精査もなく。

神宮寺はその点をクリアにしようと思った。そして寄付をやめ、自力でお金を生み出す方法を考えようと思った。そのためには資金的・人的に綿密な将来への計画作りが必要となった。10年を1スパンとし、多くの在職期間を3期とする。その中で、檀信徒に強制的な寄付をもらわない方法は何かを考えた。資金に関する計画、これを一般企業では「資金繰り」という。そして寄付に頼れない企業は、大変な苦労をしながら借入や返済を行っているの

お盆法要のゲスト

lata 一志新 (エスラジ)



〈プロフィール〉
 中学生の頃、怪我でバスケットボールを続けられなくなったことがきっかけで、ギターを手取る。その後、作詞作曲やバンド活動を経て、2000年よりリュック一つで海外を周り始める。
 ある日、美しい夕焼けを前に「これは言葉では表現できないなあ。」と気づき、旋律楽器の魅力に惹かれる。三年後、インドの弓楽器「エスラジ」に出逢いインドはベンガル地方のシャンティニケタン(平和の園)にて、ブッタデヴ・ダス氏に師事。帰国後、様々な楽器とのセッションに留まらず、絵画やヨガ、お経などと共演する。エスラジの魅惑的かつ空間的な音により、表現の可能性を広げている。

だ。一方、寺は、「寄付金」という科目を立てれば、苦勞することなくお金を集められる。ほくはその安易さから離れたかった。そして1988年から全檀家に出している決算書(宗教法人神宮寺のすべての経理)を銀行に見てもらいながら、銀行からの借り入れを考え始めた。

しかし、当時、まったく資金のなかった神宮寺はお金が借りられない。そこで一つのアイデアを打ち出した。何かを造るための寄付ではなく、長期にわたって神宮寺を護持するための基金造成『護持基金』を檀信徒に提案したのだ。『護持基金』というのは、1軒1万円を拠出していただきで10年間継続する。目標額は1億円。造成目的は、お寺に緊急事態があったときのための使用と、長期的な基金として、目の先の事業で取り崩すことなく、基本的

に果実運用を目指すものとした。提案したのは、ちょうど阪神淡路大震災が発生した翌年のことだった。つまりそのような地域全体を巻き込んだ災害で、もしも寺が全壊したら、とても寄付など頼めない。だから、自力更生の備えにしておこう、というものでもあった。檀信徒全員の賛同を得て、基金は順調に積み上がった。その基金は取り崩すことはなかったが、駐車場の買入れなどで、銀行への一定期間の預金担保として有効に使われた。

2億円を超えた銀行からの借り入れは、15年計画で返済が続けられ、あと2年で完済する。檀信徒への寄付金の負担を考えたとき、寄付を受けず、寺が独自で資金繰りを行い、その経過を檀信徒に公開する。このことは、寺に対する檀信徒の信頼が高まることになるとは実証済みだ。

すべての人に佛さまの智慧と慈悲を

宗教 慈眼山 瑞岩寺
 法人

群馬県太田市矢田堀町388
 TEL:0276-37-1231 / FAX: 0276-37-1729
 E-mail: info@zuiganji.com
 Website: http://www.zuiganji.com
 i-mode: http://www.zuiganji.com/i/

◇ 御意見、御要望はいつでもお知らせ下さい。
 ◇ お身体をお大切に、お健やかに暮らしてくださいませ。
 ◆ み仏さまの御加護を心からお祈りいたします。 合掌

将来的には、これからの収益を護持基金に投入し、基金額を増加させ、果実運用をする。そうなってくれば、檀信徒にいただいている葬儀の際の使用料は無料になる。もっと深化すれば葬儀料も全額無料化できるかもしれない。

寺とは、今までお話しした数々のものが複雑に入り組み、協調しあい、できあがっていくものなのである。

(副) いろいろ勉強になりました。是非、実践させていただきませう。ありがとうございます。

合掌
(終)